

光明寺だより

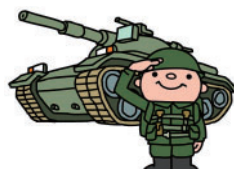
第113号
浄土真宗本願寺派
光明寺

〒793-0030 西条市大町550
TEL 0897-53-4583

心に残る詩

プーチン大統領閣下

納谷昭一郎 (83)



プーチン大統領閣下
弱い者たちを
いじめないでください
多くの人たちを
死なせないでください
スラヴの美しい街々を
こわさないでください

スラヴの大地が育んだ
豊かで偉大な文化を
世界は尊敬しています
だから
プーチン大統領閣下
スラヴに平和と安穩を

産経新聞「朝の詩」より

私たちのちかい



- 一、自分の殻からに閉じこもることなく
穏おだやかな顔と優しい言葉を大切にします
微笑ほほえみかける仏さまのように
- 一、むさぼり いかり おろかさに流されず
しなやかな心と振る舞いを心がけます
心安らかな仏さまのように
- 一、自分だけ大事にすることなく
人と喜びや悲しみを分かち合います
慈悲じひに満ちた仏さまのように
- 一、生かされていることに気づき
日々に精一杯せいいつぱいつとめます
人々の救いに尽くす仏さまのように

「転」の宗教



浄土真宗は「転」の宗教とよく言われます。

親鸞聖人はご書物の中で、随所に「転の徳」を讃えられています。

いくつか拾いだしてみますと、

「えんゆうしとく園融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を

成す正智」

★えんゆうしとく園融至徳の嘉号とは南無阿弥陀

仏のことです

「光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに、しゅうか衆禍の波転ず」

「一切の功德にすぐれたる、南無阿弥

陀仏を称うれば、三世の重障みなな

がら、必ず転じて軽微なり」

「弥陀智願の広海に凡夫善悪の心水も

帰入しぬればすなわちに大悲心とぞ

転ずなる」

「このように、念仏者の生活の上に恵まれる大きな力を「転」と示されています。

では「転」とは一体どんな意味があるのでしょうか。それは次のように味わうことが出来ます。

一、私の人生に何が来ても構いませぬ。

二、なぜならどんな時にも、それを喜びに変える（転ずる）力を恵まれています。

妙好人（篤信の念仏者）として名高い足利源左さんは、その生涯、どんな時でも「ようこそ、ようこそ、南無阿弥陀仏」と過ごされたと聞きます。

つらいことがあっても、悲しいことに遭っても、決してそこから逃げるのではなく、「我が身に起きる一切の出来事は、ご法義（お念仏のみ教え）を喜

ぶ大事なご縁なんだ」と、前向きに受け止めていかれました。

決してやせ我慢で言っているのではなく、こうなったのはこうなるだけの一大道理（縁起の道理）があったのだと納得し、前向きに受け止めていかれたのです。そこには念仏者としての確かな了解りようげがあったからです。

思えば、私たちの人生は老、病、死を初め、苦勞、失敗、不運等々、障害だらけの人生です。不満を言い出せば、一生不満を言うことになるでしょう。

そんな中であって、いかなる事もお念仏を喜ぶ大事なご縁として頂くことが出来たなら、障害だらけのこの人生が、障害のない人生へと転じられていくのです。

親鸞聖人はお念仏に生きる人々を、「念仏者は無碍むげの一道なり」（『歎異抄

第十條』と仰られました。

つまり念仏者は障害のない人生を歩むことが出来ると仰っています。

ここでいう「障害のない人生」というのは前述の通り「障害を障害と感ぜない人生」ということです。

障害は依然としてあるのですが、それを障害としない、そういう人生を歩むことが出来るのです。

問題が「なくなる」のではなく、「なくなる問題」の一つ一つが解けるのです。その解く力が「念仏の智慧」なのです。

甲斐和里子（京都女子大創設者）女史は、そうした念仏者の人生を次のように詠っています。

岩もあり 木の根もあれど さらさらと たださらさらと 水の流るる

川の水は、岩や木の根っこなどの障害があっても、決してそれを障害とせず、川上から川下へと自在に流れてい

く。しかも、その障害を避けようとするのではなく、また反対に突っ張ることもなく、川は淡々と流れていく。

念仏者の人生もまたこの風情であるという歌です。

障害を障害としない、否、それどころか障害を恵みとさえいただいたいく。まさに、お念仏のみ教えは、この人生を自在に生きる道を説いたものだと思います。

そうしてそのように歩む人々を阿弥陀さまは最大の賛辞をもって次のように褒め讃えて下さるのです。

仏言広大勝解者 是人名芬陀莉華

『正信偈』

何とあなたは人生の難問題を見事に解決していくものじゃ。まるで泥中に咲く芬陀莉華（白蓮華）のようであるとほめ讃えて下さるのです。

蓮の花は泥の中に根を下ろしながら、泥水とは似ても似つかない美しい華を

咲かすことに例えているのです。

このように、我が身に起きる一切の出来事を、ご法義を喜ぶご縁にしていく（転じていく）ことができれば、苦難の人生の中に身を置きながら、そこにはすでに苦はなくなるのです。

それがお念仏の教えに生きる人々の人生です。

まさにお念仏の教えが、「智慧の念仏」と言われるゆえんであります。



―お盆について― 昨年も同様の説明をしています

お盆は仏教行事の中で最もよく知られた行事です。そこで、お盆にかかわる疑問点についてお答えします。特に浄土真宗のお盆の意義についてご理解ください。

問 なぜお盆と呼ぶのでしょうか？

答 お盆は正式には「盂蘭盆うらぼん」と言います。これはインドの古い言葉「ウランバナ」を音写したものです。

意味は「倒懸たか逆さまに吊るされるたか大変な苦しみ」ということで、このような苦しみを受けている者を救う仏事を盂蘭盆会、盆会、略してお盆というのです。

問 お盆の期間はいつからいつまでですか？

答 「盂蘭盆経」の説話によれば、旧暦7月15日にあたります。それが、いつの頃からか、13日に亡き人の霊がこの世にかえり、14、15日と滞在し、16日に再びあの世にかえるという民間信仰が定着しました。この通説から、現在は、13日～16日の間がお盆ということになります。

ただし、浄土真宗では亡き人は命終えると同時に、阿弥陀さまのご本願のハタラク本願力で直ちに仏さまになられます。そうして、迷える私たちを救うために、すぐさま娑婆世界へ還ってこれられ、いつでもどこでも、私たちを護り、導いて下さっていますので、お盆の時しか、かえらないという事はありません。従って、迎え火や送り火はしません。

問 どのようなお飾りをすればいいのですか？

答 浄土真宗では、お盆だからといって、何か特別なお飾りをする事はありません。

しかし、お盆のご縁を大切にすることを意味合いから、お仏壇をお掃除し、お法事の時のように、仏具は五具足（ローソクたて一対・花立一対・香炉）にして、お菓子・果物・お餅をお供えするのが良いでしょう。

また、他宗では、亡き人の霊を迎えて追善回向ついでんきやうをするために、「精霊棚しょうりょうだな」といったものを用意します。精霊棚の前で読経することから「棚経たなきやう」と呼ばれています。浄土真宗ではこうした棚はしません。

問 浄土真宗のお盆の意義とは？

答 古くから民間信仰としてご先祖がかえってくるといわれるこの時期に、亡き人のご恩を偲しのびつつ、「この私もいずれ、お浄土に参らせて頂きます」と、私のいのちの帰るべきふるさとがお浄土であることを、改めて確認させていただき、その尊いご縁にしていくところに浄土真宗のお盆の意義があります。



驚愕の事実

見仏

他宗では悟りの行の一つに「見仏好相行」という仏さまの姿を見る行があります。この行は仏様の姿を見ないうちは終わらないと言われており、長引いたら5年、10年とかかるそうです。そんな行を通して見仏を体験された堀澤祖門和尚の体験談です。

和尚は当初見仏の期待に胸を膨らませて一日十四時間の行を繰り返すのですが、しばらくすると行の苦しさから深刻な懷疑心に悩まされるのです。

「仏様が出てくると言うけれどもそんなものは嘘っぱちに違いない」

「俺は一体何をしているのだろう」

そんな思いで続けていく修行は苦痛そのものです。その内、見仏の期待も諦め、ただ黙々と修行を続けたそうです。そのような日々が何週間か過ぎ去り、修行を始めて三か月、和尚が、床に座って仮睡をしている夜中のことです。

わずかなローソクのほの暗い室内に仏さまがスーッと姿を現されたのです。それと同時に和尚は激しいショックで目を覚ましたと言います。目を覚ましてもそこ

に仏様はつきりとおられたのです。目を開いても目を閉じても仏様はつきりと見るこゝとが出来、この開目・閉目こそが好相を得る条件の一つです。

身の丈およそ一メートル程度、四、五メートル前方で、しかも二・三メートルの高さの空中に仏様が立っておられて和尚を見つめ、少しずつ動いてこられたと言います。余りの感動で硬直した身体で思わず合掌して仏様を見上げていたのですが全身がガタガタ震えて止まりません。おまけに両眼から涙があふれ出て止まらず、汗と一緒に顔の上を流れ落ちるの分かるのです。

しばらくすると仏様の手元から一本の細い帯のようなものがスーッとおりてきて和尚の腰のところを巻いて、そのまま仏様の手元へ返っていくのです。そうして仏様がその紐をお取りになられ、そのまま後方へバックなさる。そうすると紐を巻かれた和尚の腰のところに軽いショックがあり思わず浮かび上がるうとするのです。そういう刹那に仏様はだんだん遠ざかりそのまま闇へと溶け込むように消えていかれたのです。

大事なことは、この出来事が夢や幻でないことを証明しなければなりません。

すぐさま師僧を訪ねて今得た出来事を報告します。師匠とは好相行の体験者で、今日まで堀澤和尚を指導されてきた人ですから、和尚の心の内はすべてお見通しです。状況を一通り話すと、師僧は「それでよろしい。君の体験は間違いなく好相です」と認可されたと言います。これで和尚の実体験が「見仏」であったと証明されたことになりました。それとともに苦しい修行の終了宣言でもあったのです。

堀澤祖門

京都大学経済学部学生時代に比叡山に上り、仏道を究めたいと中退し、叡南祖賢の弟子となる

平成25年から、三千院門跡門主。

元叡山学院院長

【注】浄土真宗では自らの能力をもって悟りを開くという自力聖道門の教えではありません。そのような行もできない愚かな凡夫の私を当てに救いの法を成就していただいた阿弥陀如来にお任せをするという他力浄土門の教えです。今回のお話は自力聖道門に立つお話ですので参考までにお読みください。

趣味の広場



俳句を楽しむ(九十二)

森本隆を

この原稿を書いている今日は七夕です。梅雨もこれからいよいよ後半に入り暑さも本格的になっていきます。七夕という行事は俳句をする人にとって少々やかいかいで、正しくは旧暦七月七日の行事であり、秋の季語になります。新暦のまま「今日は七夕です」とテレビで言うのを聞き、つい七夕の句を作り句会で発表し、「今はまだ夏なので七夕の句は秋になってからにしましょう」などと注意されることがよくあるのです。さて、先号からは一年を二十四にきざんだ二十四節気について俳句をみています。今号は、夏と秋のそれぞれ六つの節気を見ていきましょう。

(夏)

- 立夏 五月五日〜五月二十日頃
- 小満 五月二十一日〜六月五日頃
- 芒種 六月六日〜六月二十日頃
- 夏至 六月二十一日〜七月六日頃
- 小暑 七月七日〜七月二十二日頃
- 大暑 七月二十三日〜八月六日頃

(秋)

- 立秋 八月七日〜八月二十二日頃
- 処暑 八月二十三日〜九月七日頃
- 白露 九月八日〜九月二十二日頃

秋分 九月二十三日〜十月七日頃
 寒露 十月八日〜十月二十二日頃
 霜降 十月二十三日〜十一月六日頃
 塩壺の白きを磨く小暑かな 山西 雅子
 青竹に空ゆすらるる大暑かな 飴山實
 大暑なり能登黒瓦かがやけり 高島筈雄
 夏の二十四節気は今日の時点で夏至までもう過ぎ去ってしまい小暑と大暑二つしか残っていません。例句も以上の三句しかあげませんが、いかにも真夏らしい三句です。塩を入れる壺や青竹・能登産の黒瓦を材料に見た風景を感じたこと、日常生活のひとコマをさりげなく俳句にただけですが、暑さや真夏の季節感は良く伝わってきますね。俳人は、暑いとか苦しいとか直接俳句では表現せず、俳句を読んだ人に感じ取ってもらうことを大切にします。この時期の季語には「猛暑」、「酷暑」、「炎屋」、「熱帯夜」、「炎暑」、「灼く」など字を見ただけでも暑くてたまらないものがたくさんあります。さて、秋です。

急ぐ雲急がぬ雲に秋立てり 細見 綾子
 秋立つやこつこつと越す跨線橋 大野林火
 山を見ていちにち処暑の机かな 西山 誠
 手習の仮名も白露の夕べかな 笹尾 操
 掌に秋分の蟻やはらかし 桧野 子草
 水底を水の流るる寒露かな 草間 時彦
 霜降や地にひびきたる鶏のこえ 滝沢伊予次
 「処暑」は暑さも少しやわらぐころ、「白露」は朝夕露がおり始め、「秋分」昼と夜が同じ長

さとなり秋も本番。「寒露」や「霜降」はいよいよ冬もすぐそこ。例にあげた七句にもそのときどきの季節の感じがよく表現されています。今回は夏の残りや秋の句をかけたで見ましたが、二十四節気のように約二週間きざみくらいで季節の移り変わる様子を昔の人は敏感にとらえて生活にいかしていたのです。話を現在の七月初めに戻しますが、昔の梅雨は毎日のようにしとしと降り続き最後に大雨や雷があつてある日すかつと梅雨が明けていた様に思います。今ごろは晴れる日も多く時折の豪雨、線状降水帯だとか聞き馴れない言葉まで耳にし、水害まで当り前のような荒れた梅雨となつてしまいました。暑さも昔と少々ちがう暑さのような気もします。いよいよ本格的な夏がひかえています。健康第一に、元気で夏を乗り切つて下さい。



住職書作品



【本文】 双鷺下

【意味】 二羽の鷺さぎが下りてくる

BOOK 本

『新時代の浄土真宗』



発行所 (株) PHP 研究所
著者 浄土真宗本願寺派総合研究
定価 1200円 + 税

本書の発刊目的は、親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年をご縁として念仏者として生きる意義を再確認するとともに仏法が現代社会の問題やこれからの時代にどう貢献していけるのか、その可能性を示し、広く宗門内外に発信するために企画されたものです。

以下の三部構成になっております。

第一部 み教えに生き方を問い聞く

第一章 「生き方を課題とする事の意義と意味」

第二章 ご門主のご教示

第一節 念仏者の生き方

第二節 「私たちのちかい」に学ぶ

第三節 新しい「領解文」に学ぶ

第三章 「生き方」を問うとは

第二部 宗門のいま

第三部 これからの時代における仏教、浄土真宗

が果たしうること(鼎談)

光明寺のホームページ

南岳山光明寺

検索



- 【川柳】
- ★おむかえは何時でもいいが今日は嫌
 - ★ウイルスも上司の指示も変異する
 - ★マスク顔確信持てず見つめあう
 - ★あつ、マスク！降りた階段また昇り
 - ★名所よりトイレはどこだバスツアー
 - ★読み終えておいた棚には同じ本
 - ★あの人は歳やと話す八十才



言葉のプレゼント

意志が濁れば意地になる
 口が濁れば愚痴になる
 徳が濁れば毒になる

★次回発行予定：11月下旬

「光明寺だより」をご家族の皆さんで
お読みください



★住職の子供たちも順調に成長しています。この四月から長女の心は小学四年生、二女の美乃梨は小学二年生、長男光は幼稚園年中さんになりました。四月二十四日、住職家族五人で本山に参拝しました。

★六月五日愛媛銀行西条支店でグラウンドオープンがあり長男の光がオーピングセレモニーでマリヤ幼稚園の園児と一緒に踊りを披露しました。その模様がテレビ愛媛・あいテレビなどで夕方方のニュースで放映されました。

★前住夫妻は健康を兼ねて毎日ウォーキングを続けています。

